

消防団員等公務災害補償等全国研修会・ 事務説明会

平成23年10月11日（火）、東京都中央区において、関係団体職員168名の出席をいただき、標記の会を開催いたしました。今回は、東日本大震災の影響で開催を見合わせていた事務説明会を兼ねて行うこととし、講演に加え事務説明の時間を特別に設けました。

はじめに、当基金吉崎常務理事のあいさつがあり、その後、2名の方からご講演をいただき、最後に基金職員による事務説明が行われました。

講演は、減災・復興支援機構理事長で社会安全研究所顧問の木村拓郎氏による「東日本大震災の教訓から」で始まりました。木村氏の講演は、被災地に何度も足を運ばれた経験から、現地の状況や被災者の声、そして、震災の教訓と今後の課題といった内容で、消防関係者であれば誰でも強く心を引かれる内容でした。

次に、消防基金 S-KYT 指導員井上勝明氏による「S-KYT 研修の重要性について」の講演が行われました。公務災害補償業務、退職報償金業務と並んで、当基金の根幹を成す業務である公務災害防止のために行われている S-KYT 研修について、豊富な指導経験に裏打ちされた分かりやすい内容が受講者の皆さんに伝えられました。

受講者の皆さんは、いずれの講演にも熱心に耳を傾けられ、大変に好評でした。以下にその講演内容を掲載いたします。



講演録

東日本大震災の教訓から

(社)減災・復興支援機構理事長 木村 拓郎氏

皆様こんにちは。今、ご紹介頂きました木村でございます。今日は、消防団関係の方の集まりということですので、前段の方では東日本の被害の話しをして、最後の方で消防団関係の方の安全対策や課題といった、今後に向けたお話を少しさせて頂ければと思います。

私は、災害関係の仕事で民間という立場でしてきて、今年で丸40年になります。40年でちょうど一区切りで、そろそろ引退かなと思っていた矢先に、こういう非常に大きな震災が起きました。私自身、実は出身が宮城の石巻でして、実家も今度の災害で床上浸水で4日間海水に浸かってしまいましたが、幸いにも流されず、大規模半壊という被害認定を受けたそうです。家が流された。家族が亡くなった。被災地に行くと、そんな話があちこちで聞かれます。

私は、災害の前からお付き合いがあったこともあって、宮城県の女川町の復興計画の作成を依頼されまして、8月くらいまで毎月半分くらいは女川におりました。ですから、被災地の様子をつぶさに見てきました。今日は、震災からちょうど7ヶ月目です。まだまだ震災の教訓がきちんと整理されたとは言えませんが、少しはわかったことがありますので、それをふまえながら、これからお話を進めていきたいと思っています。

教訓 自然をあなどらないこと

今回の震災はなんとといっても自然の猛威かと思えます。これは、宮城の女川町の庁舎です。みなさんから向かって左が役場で、右が生涯学習センターというところ。生涯学習センターは5階建てで、どちらも、それなりに高い位置に建っておりました。



これが、どんなことになったかということ、これが、今見て頂いた女川の役場の庁舎の屋上から撮った写真です。



3月11日の3時35分頃と言われております。向こうに大きな屋根が見えているのが生涯学習センターですが、波が押し寄せて来てこんな様子でした。反対側には、もう船が迫っていたということです。結局、女川では建物の7割が全部流されました。

また、女川の場合、5、6棟の鉄筋の建物がひっくり返りました。今回の津波で、鉄筋の建物がひっくり返ったのが女川だけです。建物自体は壊れておらず、津波の専門家に言わせても世界で初めて鉄筋の建物がひっくり返ったということでした。今、これを今後の津波の教育、学習のための教材として残していこうという活動が行われています。



女川町 健康食品販売会社
メモリアル施設として保存が決定している
世界でも女川にしかない貴重な災害遺構

これは石油タンクです。女川だけではなく気仙沼でも、こういうタンクがだいたい流されました。油が海面に浮いて火がつき、海面火災という形の火災が随分ありました。



女川町 流されてきた石油タンク

女川町では、海から1kmほど入った地点でさえ、かなりの高さまで津波が来て、斜面に瓦礫

がへばりついているところがありました。波がひいた後に瓦礫が残り、津波の高さが分かるのです。津波の研究者はそれを痕跡などと呼んでいます。

これが、隣町の石巻市です。一番甚大な被害が出たのが、太平洋に面し北上川があるこの地区でした。波で完全にさらわれ、なおかつ、火災も発生しました。それ以外に、市内も海水に浸かりました。ある程度の高台はあるのですが、波が北上川を溯上して市街地に入りました。それから貞山堀という運河があって、そちらにも波が遡上して、結局、三方向から波が入って市街地のほとんど水没し、かなり、大きな被害が出ております。



3月14日
石巻市上空より撮影

私の実家には、貞山堀の方から波が入ってきて水に浸かったのですが、貞山堀からは相当な距離があり、まさか、そのようなことが起こるとは考えていませんでした。その時の様子を聞くと、最初は津波だということがわからなくて「変だなあ」と思ったということです。何が変だと思ったかというと、台所の床下収納庫が浮いてくることでした。どこかで、水道管が破裂して浸水しているのかと思ったそうですが、時間が経つにつれ、外で「津波だ、津波だ」という声が出たので、やっとわかったということです。当初は警戒心もない状況だったということです。

これは、石巻の雄勝地区の中央公民館です。屋上にバスがのったまま、海水がひいて、バスが残ったということでこの保存運動もおきて

いるようです。



石巻市雄勝地区(市内でも特に被害が大きい地域)
建物に打ち上げられたバスはあまりにも有名

雄勝という所は、元は雄勝町という町で、合併して石巻市雄勝になったのですが、ほとんど波にさらわれてしまいました。私が現地に入ったのは震災発生から2週間後位でしたが、地面しかありませんでした。家がみんな流されて無くなっておりました。津波が来た時の避難場所になっていた鉄筋コンクリート3階建ての中学校の3階の窓でさえ、ほとんど吹き飛ばされていました。震災当日は、午前中に卒業式があって午後は誰もいなかったのが犠牲者はいなかったのですが、たまたまの話で、もし、生徒がいれば、相当な被害になっていたでしょう。

雄勝を歩いてみると、震災の爪跡が色々ありました。これは杉の枝に50kgのガスボンベが2本ぶら下がっているのです。これも、波が来て海面に浮いたLPGボンベが木の枝にひっかかって、こんなふうに宙吊り状態になって残っているわけです。このような光景もありました。



石巻市雄勝地区
波によって運ばれたプロパンガス
津波の恐ろしさを感じる

今回の災害では、いろいろなドラマがありま

した。私事ばかりで恐縮ですが、姪がこの雄勝に嫁いでおりました、命には別状はなかったのですが、家は完全に流されてしまいました。「大変だったね」と聞いたら、「いや、いろいろ事件があってね。」と言うのです。「事件ってなんなの?」と聞いたら、震災の前日に、ひいおばあさんが亡くなって棺おけに入っていたということでした。津波の後にそこに行ってみたら棺おけがないので海に行ってしまったのだろうと諦めていたそうです。ところが2週間後くらいに見つかったというのです。海から打ち上げられたのかと思ったら、そうではなくて瓦礫の中から見つかったのだそうです。見つけてくれた人はビックリしたでしょうね。そんな話もあれば、先月、石巻に行って昔の仲間と飲み会をしたら、ひどい話があって、たまたま地震のあった日に、ある人が危篤だということで親族がみんな集まっているところに津波がきて、みんな流されてしまったということでした。本当に、いろいろなドラマがありました。

これは、津波で流されて田んぼの中に置き去りにされた車です。今回の震災で車避難というのが非常に大きな問題になったのですが、車で逃げようとしたけれども逃げ切れず、結局波に流され、どんどん内陸の方に車ごと流されてしまったというのです。



石巻市渡波地区
田んぼも海水に浸かっている
今年は田植えができなかった

車はその場所に止まっていますが、車の持ち主の中には、逃げ切れた人もいれば、車のなかで亡くなった人もいたということでした。田ん

ぼも今年は海水に浸かってしまいましたので、田植えは一切なしということで雑草だらけでした。

これは、気仙沼の様子で、テレビにも随分出たかと思いますが鹿折地区というところですよ。湾から奥に500m位入ったところに船が流されてきてとどまり、途中の家はほとんど残っていないという状況です。この地区では火災が発生し、津波の後というより都市大火があった後のような状況でした。

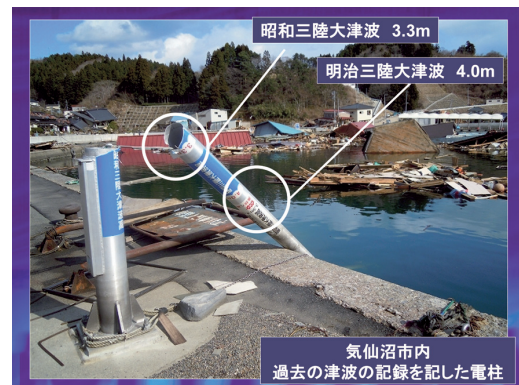


気仙沼市内
上げられた船はあまりにも有名

今回の津波災害では、気仙沼でも石巻でも岩手の大槌市でも田老町でもかなり火が出たということです。問題は結局油です。漁港の入り口にあった漁船用の重油や屋外のホームタンクにあった灯油、それからLPGタンクや車のガソリンといったものが流れ出て、なんらかの原因で着火して火が出たということのようです。出火原因は結局よくわからないと思います。例えば平成5年に北海道の奥尻でも地震があって火が出ましたが、出火の原因は結局わかりませんでした。あの状況では調べようがないと思います。消火活動もほとんどできなかったでしょうね。石巻の場合も、地震の後119番通報が入ったので出動し消火活動中に津波が来たので逃げた。ということがあったそうですが、結局、出火原因は、わからないまま今日に至っていると思います。

これは、気仙沼市内の小さな漁港です。三陸は津波対策をかなりしていて、港には必ず過去

これだけの波が来たという、サインポールといひましようか、そういうものを設置して、いろいろな啓発をしていました。しかし、それをあざ笑うかのように、今回の津波は桁違いに大きくて、折れたポールが海面に突っ込んでいます。こちらの漁港の中には流れ出た家が湾内にたまっています。一時こういう海岸線の被災者の方を海上輸送を使って救援できないかという議論もありました。実際、私も、そう思っていたのですが、結局、難しいということがわかりました。なぜかという、海底に漂流物などがかなり入ってしまっていたからです。そういうものが漁港の中に沈んでいる状況で船が入ると相当に危険であるということで、漁港を使った救援というのは、相当難しいと感じました。



気仙沼市内
過去の津波の記録を記した電柱

先日、名取市での避難の状況をNHKの番組で放送していましたが、その番組によれば津波が来たのは地震発生1時間10分後ということでした。それを聞いて、もうちょっとなんとかならなかったのかと思いました。気仙沼や女川に津波がきてから、名取に津波が来るまで30分位時間があつたのです。それだけの時間があれば、かなり動けていたはずですよ。でも、片方はもう修羅場になっていて、片方はそういうことを知らないで、どうしようかとのんきに構えていたわけです。そういうことがあり、結果的には、大きな被害が出たわけですよ。津波というのは波ですから順番に押し寄せます。ですから、先に来た所の情報が次の所に伝わってれば、

もっと被害が減らせたのではないかということ
をその番組を見て感じました。



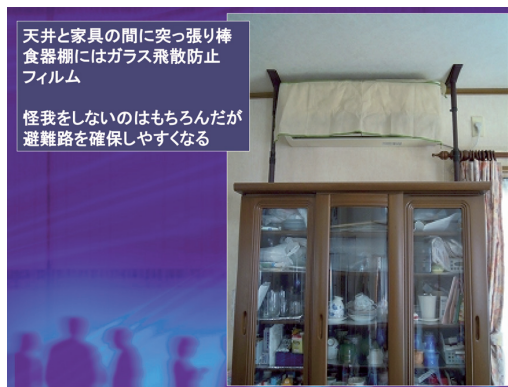
講演中の木村氏

教訓 家具の固定は基本中の基本

「家具の固定ってなに？」と思うかもしれませんが、宮城県では、かなりされています。一般の住宅でも食器棚の固定などを結構しています。宮城や岩手は、ここ数年地震が結構多いので、地震対策はそれなりにしていました。こういう言い方は、良くないかもしれませんが、今回の被害は、津波にしても相当警戒し、家の地震対策も相当している中の被害なのです。何もしていなかったら、あんな被害ではすまなかったと私は思います。とりわけ、私が前々からお話ししているのは、この家の中の地震対策です。特に家具類です。

地震が起こって津波から避難するときは、玄関を出るまでがひと勝負なのです。外に出てからも、いろいろな障害物がありますが、これを、きちんとやっておかないで家の中で家具が倒れて食器が散乱したら、家から出るまでに時間がかかってしまいます。平成5年の北海道南西沖地震の時は、発生が夜だったということもあったでしょうが、家から玄関を出るまで平均で10分位かかっているのです。真っ暗な中で、家具は倒れている、食器は散乱している、そんな中を玄関まで辿り着くのは大変です。家具を固定するという地震対策は、津波対策とは一見無縁

のように思われますが、家の中での避難路の確保という意味では非常に大事です。例えば、こちらの家ですと、食器棚に上につり棚みたいな突っ張り棒があります。このようなことでもしていれば全然違います。



教訓 庁舎も被災

今回の災害では、行政関係の建物にも被害がかなりありました。これは、テレビでもずいぶん取り上げられましたが、南三陸町の役場です。防災の為に作った庁舎、鉄骨の建物ですが。実は、この庁舎の両脇には木造の庁舎があったのです。それは、跡形も無く消えています。残ったのが、これだけです。津波が来ても大丈夫なように3階建てにし、なおかつ屋上にも出られるようにしたわけですが、結果的にはここに50人位が上って、そのうち33人が死んでしまったという状況だったわけです。



これは冒頭でお話した宮城の女川の役場です。こども、波が上まできました。これは、一

部4階建ての基本3階建てですが3階まで波をかぶりました。4階は大丈夫だったそうです。



女川町庁舎
高台に仮庁舎を建設

当時の話を詳しく聞いてみると、平日の午後2時46分ですから、もちろん役場の職員はいましたが、3月11日は町議会の最終日だったそうで町議会議員もいたそうです。議会がちょうど終わった瞬間に大きな揺れが起こり、非常に長い揺れで3分から4分という話しもあります。みんなどうしたかいうと、最初は、津波が来るとは思わなかったそうですが、どんどん大きな波が来るので、これはまずいといってみんなでもう逃げ場がないですから、どんどん上の階へあがりました。最終的には、全員、約100人がなんとか4階まであがり、全員助かりました。

4階で約4時間波が小さくなるまで待っていたそうです。当日は、小雪が降っており、そうとう寒かったそうです。みなさん、暖房のきいている室内で執務中でしたから、Yシャツ1枚で避難した人もいて、寒い中4時間辛抱したということです。第1波は3時30分にきましたから7時30分位まで4階にいたのですね。しかし、このまま朝までここにいても駄目だということで、波がひいた瞬間をねらって、全員で小高い所にある神社に移動したそうです。神社の横には住宅も何軒もありました。非常に寒いですから、女性とお年寄りと子どもを住宅に入れてもらいました。

男性職員は、外気温が2℃、3℃の時にほとんどみんなYシャツ1枚しか着ていなかったそ

うで、とにかく寒かったということです。一晩外で過ごすのに、これは困ったと言っていました。そこに町長も一緒にいました。町長はやおら、神社の庫裏を指差して「あそこに行って少し何かはがしてこい」と言ったそうです。庫裏を壊して、それで焚き火をしたそうです。職員が「神社を壊していいんですか」と言ったそうですが、町長は「神様が人を救わないでどうするんだ」、「こんな時の為に神様はいるんだから大丈夫だ」と言って、号令をかけて神社の一部を壊してそれで焚き火をして暖をとったというような話しがありました。

さきほどお話したように、議会の最終日で議員さんも16人いたそうですが、そのうち4人は地震の後、自宅が心配だと言って自宅に向かったそうです。その4人は気の毒に全員亡くなりました。

女川には原子力発電所があります。全国どこの原発にも事故に備えて、オフサイトセンターという、何かあった時に現地の対策本部になる建物があります。女川にもそれがありませんでしたが、波にすっかりさらわれて見るも無残な姿になってしまい、所長さんが亡くなったそうです。

女川は庁舎が完全になくなり行政の機能を置くところがない状況となってしまいました。しかし、幸いなことに女川の学校は全部高台にあって1校も被災しなかったのです。そこで、学校の一角を借りて、なんとか災害対策本部を開設しようと頑張りました。その後、プレハブの建物で庁舎を作って仕事をしています。



女川町役場仮庁舎
学校の空き教室を使用している業務

ちょっと話を戻しますが、学校の中に置いた災害対策本部では、その日の搜索状況、避難状況を毎日、更新していました。女川の人口は被災前約1万人で1割弱の人が亡くなりました。震災の被災地の中でも死亡率が高いのです。

その対策本部室には避難者数のグラフが貼ってありました。いろいろな災害対策本部を見てきましたが、避難者数のグラフを貼っている災害対策本部は初めて見ました。それによれば、女川は人口約10,000人のうち約1,000人が亡くなって、約6,000人が避難者だったということです。家が無事だった人もいましたけれども。町民の6割は、当初、避難所にいたという状況でした。

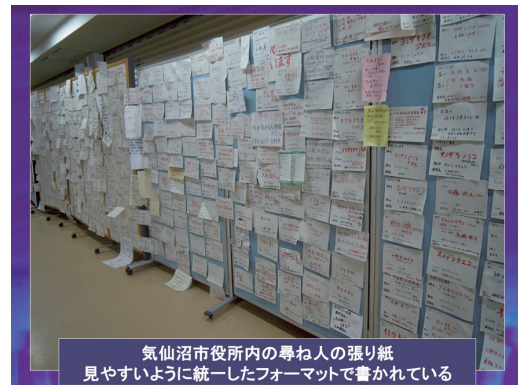
震災の直後は、店舗という店舗は全部流され、コンビニが1店舗しかなく、もちろん宿泊施設もありませんから食事もできない状況でした。町の職員の多くも家を流されてしまいましたから、夜になっても帰る家がなく、忙しいこともあって学校で雑魚寝という状況でした。

今回の災害の非常に大きな特徴は、過去の神戸や新潟の大きな地震と違って、町が消えてしまったことです。女川もそうです。南三陸、大槌、陸前高田も町が消えてしまいました。ですから、物が欲しくても、いくら、お金があっても買えないのです。役場の職員の食事は、避難所で出るものと同じものを物資置き場で1日2食立っただまま食べるという状況でした。

教訓 ライフラインも長期復旧せず在宅被災者も物資不足

それからライフラインです。今回の震災では本当に困りました。みなさんも、経験されているでしょうけれども、固定電話、携帯電話がまったく通じない状況でした。ですから、人を探すというのは、一苦勞でした。これも私事ですが、私の母親は96歳で実家で長男と暮らしているのですが、地震の時はデイサービスに行っていました。地震の後どうしたかというとき

ービスの職員の方が高台に車で運んでくれたらしいのです。学校の体育館に3泊ほどお世話になりました。ほとんど食べる物もなく、毛布もなく、非常に寒い夜を3泊過ごして家族に発見されて帰ってきたのですけれども。みんな身内を探してウロウロしておりました。この張り紙もそうで、「私は〇〇にいる」とか、「××さん連絡ちょうだい」という張り紙が、すごくたくさんありました。それくらい、今回、通信のダメージは大きかったですね。NTTが特設公衆電話という無料の電話をつけてくれたのですが、これも、だいぶ後になってからのことで、当初はなかなか連絡がつかない状況でした。



気仙沼市役所内の尋ね人の張り紙
見やすいように統一したフォーマットで書かれている

それから、水道も被害を受け1ヶ月くらい水が出なかったところが、ざらにありました。給水車が来て、ポリタンクで運ぶという光景が見られました。今までの被災地ですと車で運んでいる人が多かったですね。ところが今回は、車が流されて無い。車はあるけどガソリンが無い。ということで車がまったく使えなかったのも、結局、自力で運ぶしかない状況でした。でも、高齢者にはできないですね。非常にみなさん困っていました。

電気が来たときには、井戸水をポンプアップして、近所の人にわけてあげるという光景もありました。今度の震災で非常に特徴的だったのは縁故避難です。さきほど女川で町内の約6割の人が避難所にいたと言いましたが、避難所は超過密で寒いのです。水も電気も何もない。も

うどうしようもないと親戚縁者を頼ってかなりの方が避難しました。その結果何が起きたかという、受け入れた親戚縁者の方が悲鳴を上げてしまったのです。どうしてかという、普通、家の中には、工夫すれば1週間分くらいの食料があるはずですが、たとえば3人家族のところには15人くらいの方が来れば、本来だったら1週間もつはずの食料が3日くらいで底をついてしまいます。買いに行こうとしても、見ての通りお店は全滅です。遠くに買いに行こうとしても、車が流されて無いか、ガソリンが無いかで移動ができません。ですから、食料の調達ができなくなってしまいました。

また、非常に不思議な現象がおきました。避難所の方は、救援物資で食事が出ますが、家が残っている人の食事がなくなってしまうという現象です。従来では、ちょっと考えられない事態です。

商店も品物が入ってきたら店は開けるのですが、品物が無くなったらすぐに閉めてしまいます。ですから、開店した時は長蛇の列です。何か買いたいと思って並んでもなかなか買えないのです。

その後、テレビのニュースなどで一般家庭の物資が無いという報道がされ、救援物資が各町内会に個別に届くようになりました。これは非常に珍しいことです。町内会に連絡をし、その役員さんが、地域に分配するという光景がありました。各町内会に「避難所では物は配りません」、「どこそこで受け取ってください」という張り紙がされ過去に無かったような事態が発生しました。

教訓 地域にはリーダーが不可欠

こういう事態をふまえて、非常に大事だったのは、町内会のリーダーの役割です。各町内にいろいろな救援物資がやってきます。それを、みんなに公平に配るといことです。

公平にとってもそれが難しいのです。必ず不満が出るのですが、それでも、地元町会の役員さんは、知恵をしぼって、「今日は、高齢者優先です」とか、「今日は家族の多い人優先です」と、救援物資が来るたびに分配活動をしていたのです。



教訓 過酷な避難所生活

一方、避難所ですけれども、この災害ではピーク時に避難所にいた人は47万人と言われていいます。阪神淡路が32万人ですから、それよりはるかに多いわけです。これは、さきほどから何度もお話をしている宮城の女川町の総合体育館で発災から3週間目ということですが、ダンボールで間仕切りをして、自分の家ではないですが、やっと仮の住まいができたかなという感じですね。



この総合体育館には、この時点で約600人いたと思いますが、最初の段階では2,000人を超えていました。もう、足の踏み場もないというよう

な状況でした。こういう間仕切りがボランティアから届けられ、人もだいぶ少なくなって、少しはましになったという状況です。

これも避難所ですが、先ほど見て頂いた女川の3週間目と同じ時期ですけど、こちらは、まだ間仕切りが届いていない状況で雑然としていますね。前の写真と比べてみると、目につくのがパイプイスです。パイプイスが非常に多いのがわかるかと思います。これは高齢の方が膝が悪くて立ったり座ったりが大変なので、イスを出して生活をするということなのです。



最近、避難所を見て回ると高齢の方が多くです。仮に皆さんの地区で大災害が起って家がないということになると避難所が必ず開設されます。避難所というのは、だいたい、小中学校の体育館や教室や公民館です。これは、行政があらかじめ指定しているところもありますけれども、その時、急遽指定するところもあります。こういう避難所での生活を若い人は嫌います。まあ、誰でも嫌うのですが、とりわけ若い人は嫌って入ってきません。彼らがどこに行くかという、友達の家や実家などでこういうところを避けます。そうすると、必然的に高齢者ばかり残るのです。冒頭でお話ししましたが、今日で、ちょうど震災から7ヶ月目です。石巻市は今日で避難所を閉鎖するというので、今日で避難所は無くなります。でも、どうしても行くところのない人は、またどこかに集約されてそこで集団生活を開始することになります。この

7ヶ月間というのは、ちょうど阪神淡路大震災と同じです。阪神淡路大震災の発生が1月17日で神戸の避難所の閉鎖が8月20日ですから、ちょうど7ヶ月間です。避難所の生活というのは過酷です。宿泊施設ではありませんから床が固いです。体育館はまだましかもしれませんが、教室ではピータイルの上に直に寝るなど硬い床に直接寝なければなりません。それからトイレです。水洗トイレですから水が出ないのではトイレもままならない。しかも、小学校のトイレは子供用ですから個室が狭いのです。高齢の方は、こういう避難所では苦勞します。

トイレがままならないということで、高齢の方は我慢してしまうのです。水を飲まない。お弁当も食べません。食べたならトイレ行きたくなるから食べなくなってしまうのです。その結果、非常に不幸なことが過去に起こっています。

阪神淡路大震災の時に出てきた言葉で「震災関連死」というものがありました。要するに、血圧が高いなどの持病がある人が避難所に入り、トイレもままならないので水を飲まないということになると、血液がドロドロになって血圧が一気に上がるということになります。最終的には脳梗塞、心筋梗塞、脳溢血という病名がつかれますが、その背後にあるのはトイレなのです。

阪神淡路大震災時には、これで約900人亡くなりました。地震で助かっていたながら避難所に入ってから約900人が亡くなりました。その後、7年前の中越地震でも関連死があり、今回も関連死の認定がされています。

この関連死で、なぜ、わざわざその関連死を認定するかというと、実はお金が絡みます。どういうことかということ、災害弔慰金法という昭和48年にできた法律があって、災害による死亡認定がなされると弔慰金法の対象になってきます。この弔慰金法の対象と認定されると、一家の大黒柱の場合で500万円、それ以外の人は250万円という金額が出ます。かつては、この半分だ

ったのですが、平成3年の雲仙の災害の時に一気に倍になりまして、今の数字になっています。

災害というのは、本当に痛ましいことですが、どうしても最後はお金の問題が色々絡んできます。今回の場合、ご承知のように震災から3ヶ月たっても行方不明の人は、届けがあれば死亡認定を出すという措置がされました。死亡認定が出ることによって、弔慰金、相続、保険金の問題、これらが全部絡んでくるのです。

その災害による死亡認定かどうかというのは認定委員会が作ります。これは、完全にマル秘でやります。メンバーは、お医者さん、弁護士さん、それから福祉関係者など、ごく少数の人が災害による死亡かどうかという判断をいたします。外に名前が出てしまうとプレッシャーがかかってよくないということで極秘に処理されて、認定される、あるいは認定されないという結論を出すということになっています。

これは、避難所の中の3ヶ月目ですから、6月の後半くらいでしょうか、非常に異様な光景ですね。なんか白いものがいっぱいありますが、これは、昔懐かしい蚊帳です。私のイメージだと蚊帳はグリーンですが、白いのもあるのですね。これをダンボールのパイプに引っ掛けて使います。これは大学の先生が考案したそうで、そもそもは、蚊帳を吊るために考えた物ではなく、避難所のプライバシーを守るために考案された物です。



発災から3ヶ月目
女川町総合体育館
ハエ・蚊対策のため蚊帳をつっている

震災から2ヶ月ぐらいになると、このダンボ

ール製のパイプにカーテンのような物をかけて、目隠しが作られました。福島県の郡山市にビックパレットという、原発事故で逃げてきた方が2,000人以上暮らしていたところがあるのですが、そこでは、これを使って布製の間仕切りを下げ、隣の家族が見えないようにしていました。今後、これは主流になるかもしれませんが賛否両論です。結局、プライバシーは守られるけれども、布で全部仕切ってしまうので風通しが悪くなる。それと防犯上問題があるという意見もあります。それから、ひょっとすると一人暮らしのお年寄りが中で死んでいても誰もわからない。そういうことが懸念されるというわけです。一方では、他の人の目が気にならなくていいという意見もあります。

いずれにしても、今回はこれを使って蚊帳を吊っていました。なにしろ今年の夏は、現地に行った方はおわかりでしょうけれども、ハエが大量発生しました。冷蔵庫や冷凍庫、流れた加工用の魚があちこちにちらばって、ハエが大量発生しまして食事をとっていようものなら大変です。しかも大きなハエです。だから、みんなこのように蚊帳を吊って自衛策を講じていたのです。

食事は、ひどい物でした。地震から最初の1ヶ月くらいは、本当にパン、おにぎり、水だったのですが、1ヶ月を過ぎて、たまにはお弁当が出るようになりました。ところで、避難所が出る食事というのは誰がお金を出しているのかおわかりですか。ボランティアやコンビニが好意で出しているわけではありません。行政機関がお金を出して調達しています。こういう食事代もかなりの金額になります。たとえば阪神淡路大震災の時は、食事代が約18億円かかりました。

そういうお金はどういう仕組みで出るのかというと、国の方でそれを出す災害救助法という法律があります。例えば避難所の蚊帳を買う、仮設トイレを設置する、夏場だから扇風機買う、

そういうのも全部この災害救助法によるのです。食事についても全部その災害救助法の範疇です。

この災害救助法による食事代は決まっています。今いくらかとといいますと、1人1日1,010円と決まっています。事前に単価が決めてあります。なぜかという、そういう時は見積りをとっている場合ではないですね。すぐ発注しなければいけません。ですから、だいたいの単価を決めてあります。この1人1日1,010円は厳守ではありません。その金額で、どうしても調達できない時は金額を増やすことが可能です。法律を所管している厚生労働省の社会援護局と被災した都道府県が交渉して値段を上げてもらう方法があります。それを特別基準と言います。こんなことも、頭の片隅に入れておいて頂けるといいと思います。

消防関係の被害と教訓

みなさんの今日のメインテーマであります消防関係のお話をいたします。さきほどから何度もお話ししている宮城県の女川町の消防団の被害です。女川町では、消防団員233人中7人が死亡、行方不明となりました。岩手、宮城、福島 の3県では8万人中253人が死亡、行方不明となっています。これは、今の段階で私が知っている数字です。

消防車両は女川町では28台中15台、約半分失いました。3県では257台ということですが総数が判っていません。消防職員は、3県で約7,000人中27の方が亡くなりました。

女川は3年くらい前に新庁舎を建てていましたが、残念ながら3人の職員の方がそこで犠牲になりました。この新庁舎もそれほど高台にはなかったのですが、地震が来たら消防車両を高台に出すという訓練を頻繁にしていた、今回もすぐ高台に出しました。ですから、この庁舎では消防車両を1台も失っていません。職員は、

すぐ、消防車両に乗って高台に移動しましたが、もぬけのからにするわけにはいかないということで、署長以下5人の職員が残りました。ところが、津波があまりにも大きくて5人は屋上に上がってなんとかしのごうとしたのですが、残念ながら、それをはるかに超える波が来てしまいました。屋上に瓦礫の残骸が残っていますね。ここまで波が来たということがわかりだと思えます。屋上に5人上がり、5人とも流されましたが、2人はケガをしましたが助かりました。署長を含む3人は亡くなりました。この署長は、私の高校の後輩なのですが、行方不明になっており今も見つかっていません。この庁舎はもう使用できずで、今は仮庁舎で仕事をしています。



まだ新しい女川消防署も被災。職員3人が犠牲に

岩手の大槌でも消防庁舎が大破し、車両も無残な姿となりました。陸前高田の消防庁舎も同様です。

これは、先に見て頂いた女川ですが、消防庁舎なくなっていましたので、今どうしているかということ、運動場の施設の一角を借りて、そこを仮庁舎としています。



女川消防・仮庁舎(9/22)
(運動場の施設を間借り)

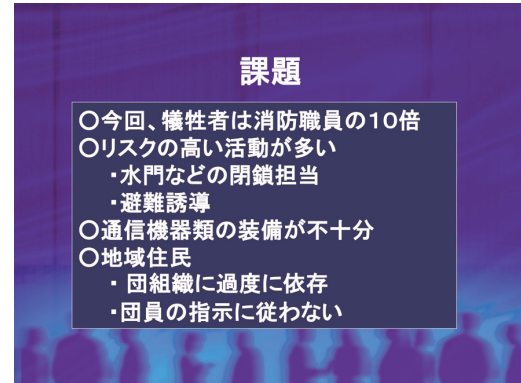
上:署長室
左:事務室
(まだ電話もない)

これが事務室で、ここは署長室です。まだ、電話も何にもないというような状況で仕事をしています。仮眠室もありません。

女川で震災後の消防団の活動はどうだったのかという話を聞いております。とにかく無線は全くなく、携帯電話も全く通じませんでした。要するに現場では情報は何もありませんでした。津波が来るので、地震があった後は避難誘導をするということは決めていました。今回はいったん家に帰って家族の安否確認をし、その後、徒歩で避難誘導をしました。避難誘導は建物火災のように統一的に行うのではなくて、基本、各自の判断で独自性にまかせて行われました。基本はペアですが相方が来ない場合は1人でやるという形を結局とったのではないかと思います。消防団としては災害時要援護者、主に高齢者に声をかけるのですが、団員がそういう人たちを全員運ぶことは無理なので、運ぶのは地元の自主防災組織、要するに町内会にお任せしていました。こういう活動をしていました。

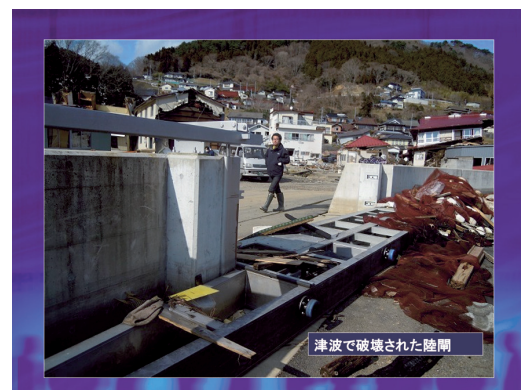
大津波が来て大混乱でしたが、その後一息ついて、団員の安否確認がいつごろ取れたかというとおおむね1週間後でした。最終的に全員の安否がわかるのに約3週間かかったということです。それから、震災後に何をしていたかという、海の流木集めや遺体の搜索でした。避難所への支援活動は特にはしていませんでした。それから、困ったと言っていたのが、仮設住宅入居後です。これが抽選入居ということになったので、消防団としての組織がバラバラになってしまったということです。まとまった活動ができなくなってしまって心配だという話をしておられました。

今回の震災での課題をまとめてみました。

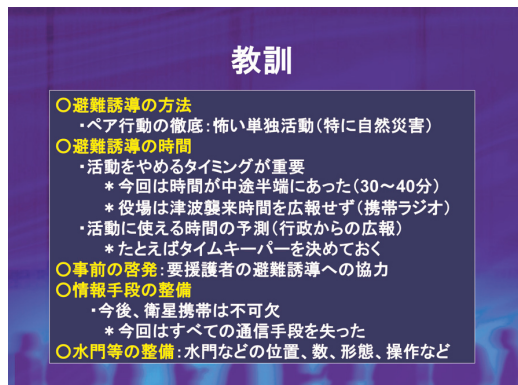


さきほどお話ししたように、犠牲になった消防団員の方が非常に多いです。その理由は、やはりリスクの高い活動です。水門の閉鎖などは最前線でやらなければなりません。避難誘導もしかりです。それからこれもよく言われることですが、情報に関する機材の装備が不十分だということです。また、地域住民から消防団組織が過度に依存されているのではないか。その一方で避難誘導をしても従わない住民がいて説得に非常に時間がかかった。そういった課題があると感じます。

岩手の田老では津波防止堤の閉め切り作業を消防団が担当していました。これは、防潮堤のところで水門というか扉があり、手で閉めるのですが、そういう役割を消防団が担っているわけです。これなどは閉めたのですけれど津波で倒されてしまっています。こういう作業に追われるために、ついつい、団員が避難するタイミング失ってしまうということもかなりあったのではないかと感じます。



最後に教訓としてまとめたのがこれです。



まず、避難誘導です。これは今後もペアで行うべきです。単独行動は、非常に怖いです。ペア行動を徹底する。特に、自然災害の場合、津波だけではなく風水害の時も単独行動が多くなりがちです。建物火災の場合は建物1箇所に対してみんなでそこをめがけて活動します。常備消防が全体の指揮をとるので、それほど極端な状況は生まれませんと思いますが、風水害などになると、どうしても戦線が拡大してバラバラに行動することが多くなってしまいます。これは、非常に怖いです。ですから、やっぱりペア行動を徹底するというのは、ひとつだと思います。

それから避難誘導の時間です。活動をやめるタイミングは非常に悩ましいです。女川で聞いても、今回は、逆に時間が中途半端にありすぎたという話がありました。地震があってから津波が来るまで30分から40分ほど時間があつたがために、ついつい一生懸命やりすぎたということもあったようです。それに対して、これは、行政側の問題かと思いますが、役場は同報無線、防災行政無線というものをしています。それを使って大津波警報などを広報します。ところが今回の場合、津波が何時頃に来るかということ広報していないのです。

大津波警報は出しました。しかし何時頃来るか。おおむね3時30分頃に来るということは広報していないのです。結局、消防団員は津波がいつ来るかわからない中で避難誘導をしていた

というわけです。それもあって津波に巻き込まれてしまったということになります。

現場の最前線で動いていると、まったく情報がないのです。本来であれば受令機があればいいのかもしれませんが、おそらく、今度のような大災害になると消防本部もそれほど系統だったきちんとした情報伝達はできない可能性があります。そこで、一番手っ取り早いのは携帯ラジオです。今回も携帯ラジオは結構役立ったと皆さん言っておられます。放送局はかなりの確に情報を出しています。ですから、携帯ラジオをできれば全員に、少なくともペアで動くときの1人には必ず持たせることが大事だと思います。今、おそらく受令機を持っている消防団は少ないと思います。携帯電話は、今回、全く機能しませんでした。そうすると、外からの情報がまったくなくなってしまいます。ですから携帯ラジオを首からぶら下げて、両手があくようにして、イヤホンで聞くのではなく音声が直接出るようなタイプの携帯ラジオを団員に持ってもらうことは、一つの有効策かと思います。携帯ラジオからは気象庁の情報などを得られますので、現場で活動する団員も、せめてそれくらいの情報は把握しておくべきだと思います。

これは、今回の津波と直接関係はありませんがこんな話もあります。消防団のポンプ車にもラジオがついていますが、多くの場合、AMしか入らないのです。NHKなどでも時々災害に関する大事な情報をFMに切り替えることがあります。そうすると情報が入らなくなってしまいます。ですから、ポンプ車にラジオがついているから大丈夫ではなくて全団員にできれば防水型のラジオを持たせて、せめてラジオからの情報くらいは得られるようにしておく。これが当面すぐできる対策ではないかと思いますが。ペアで行動することにして、1人はタイムキーパーで「もう作業は断念して行こう」ということを、安全管理をできるような仕組みをきっち

り作るのだと思います。

それから3つめは事前の啓発です。これは、さきほどお話しした、なかなか逃げてくれないということがないように普段から啓発することです。「すぐに逃げるんだ」と言っても「私は、もう歳だからもうこの家と流されてもいいんだ」と言われて、そこで手間取って、巻き添えになってしまうことを防ぐためにもそうすべきです。

ある消防団員の方がおっしゃっていました。「うちの消防団には美談はいらない」と。「そんなものはなんの役にも立たない」、「マスコミに美談と言われたって全然うれしくない。もう、やめてくれ」と。ですから消防団員から逃げろと言われたら、すぐに従ってもらえるように、普段から啓発、教育しておくことです。これは是非ともやっていただきたいと思います。

それから、情報手段の整備ということでは衛星携帯電話があります。これは、今回、通信が全くできなくなってしまったので、是非とも欲しいという現場の要望がありました。

それと水門あるいは陸閘です。それらを今後どうするのかということです。岩手などでは非常に陸閘が沢山あって、それを閉めるのに時間がかかったことで避難のタイミングを失したという話もあります。ですから、今後復興で作られる場合も、すでにあるところでも、水門の位置を今の位置でいいのか、陸閘の位置が今の位置でいいのかということを考えて欲しいと思います。

昔は人が住んでいるすぐそばに水門を付けていたかもしれませんが、でも、今は車がありますから、住宅地から離れたところに水門を付けて、水門や陸閘が破られても、被害が大きくなるないように工夫するということも可能ではないかと思います。それからその数です。沢山あれば普段は便利ですけれど、場合によっては、本当に凶器になりますから、もっと減らすということも検討すべきではないでしょうか。また形体も今のような大きさでいいのか。もっと小さくてもいいのではないかという議論もするべきだと思いますし、緊急時の操作を全部消防団がやるのかということや、消防団員が危険な状況に置かれられないような緊急時の操作方法というのはいいのかという検討も必要ではないかと思います。おそらく総務省消防庁でも今後検討されると思いますが、すぐできること、少し時間をかけてやるべきこと、いろいろあると思います。いづれにしても消防団員の生命をしっかりと守るような対策を今後打っていかなければなりません。

今のままですと、消防団員になったら危ない、やめたほうがいいということになりかねません。それでなくても消防団員数が減少しているわけですし、そういう意見が出てくると、今後、消防団員の皆さんの活動がより厳しくなるのではないかと思いますので、ぜひ、こういう安全対策を、できるところからで結構ですので、実施して頂ければということをお願いして、私の話を終わりたいと思います。どうも長時間お疲れ様でした。

講演概要

S-KYT研修の重要性について

S-KYT指導員 井上 勝明氏

井上氏の講演では、画像を示しながら S-KYT研修の意義やねらいがわかりやすく説明されていました。今回はその要旨を以下にご紹介いたします。

- ・消防団員は他に生業を持ちながら広範な業務を抱えている。その消防団員の活動時の安全を確保することの先に地域の安心があると思う。
- ・消防団員の公務災害は、過去10年間（平成12～21年度）に年平均で1,300件を超えており、団員数が減少しているにもかかわらず公務災害の件数は減少していないという現状がある。
- ・最近5年間（平成17～21年度）の公務災害による死亡者は26名を数え、その中では活動現場等で心臓疾患や脳疾患を発症して死亡した割合が高く活動時の健康チェックをする必要がある。
- ・消防団員はそれぞれの家庭や職場ではかけがえのない人であり、事故が起こるのはやむを得ないという考え方を事故は絶対に起こさないという考え方に変える必要がある。それには、事故が起こった後の「墓標安全」ではなく事故が起こる前の「予防安全」という考え方が必要である。
- ・公務災害防止のためには危険予知能力のある消防団員を育成する必要がある。そのための S-KYT研修



講演中の井上氏

である。

- ・S-KYT研修の構成は講義と実技とDVDの上映の三つの要件からなっている。講義ではS-KYTのねらいを説明し、実技では指差し呼称や健康KY、4ラウンド法を行い、講義のフォローや実技の具体的な方法についてDVDを上映している。
- ・S-KYTのメインである4ラウンド法とは、消防活動をしているイラストシートを見て、その活動にはどんな危険が潜んでいるのか、それを防ぐためにはどうするかということを皆で意見を出し合うという流れになっている。それを行うことで、作業に潜む危険や不安全な行動を素早く見抜く能力を高めていく。
- ・健康KYとは、消防団がグループで活動する際に、自分自身で健康チェック、リーダーがメンバーに対して健康チェックの手段を習得するものである。
- ・指差し確認は安全確認の基本である。4ラウンド法で得た対策を皆で指差し唱和することで集中力と意識を高める。
- ・S-KYT研修には2時間コースと4時間コースがあり、各消防団の年間行事日程によって使い分けができるので、開催については基金事務局にご相談いただきたい。いずれのコースも参加者からは大変に好評である。

講演の最後には、S-KYT研修でおなじみの指差し唱和の実技が行われ、出席者の皆さんの大きな声が会場に響きました。また「S-KYT研修のねらいとするとところが良くわかった」、「開催を検討したい」といった声が多く聞かれました。

プロフィール

井上 勝明 (いのうえ・かつあき)

名古屋市消防局 OB

平成19年度に当基金のS-KYT指導員となる。以来、全国各地の消防団を精力的に指導しており豊富な経験に基づく説得力のある研修指導には定評がある。



講演風景



指差し唱和の実技